

(一橋大学経済学部、大学院、ロチェスター大学博士／  
国立大学法人 一橋大学 学長)

1978年3月 卒業

歓迎！立高生

蓼沼 宏一（高30）

立高生の皆さん、こんにちは。

立高時代の私は、多くの同級生と同様、合唱祭だ、体育祭だ、文化祭だと、一年中、行事に明け暮れる日々でした。2年生のとき、文化祭のクラス展示のチーフを務め、「受験産業の実態」なるテーマで予備校などに突撃取材に行ったのは良い思い出です。でも、数学や歴史などで面白い先生も多く、勉強もしましたよ。1年生のときの数学の家弓先生は、高校のレベルをはるかに超える授業をされていて、大学に入ってから受けた数学の講義で同じ内容が出てきたので、立高のときに散々苦勞したのは当たり前なのだと納得したものです。

立高を卒業して、一橋大学経済学部に進学し、大学院に進んでアメリカのロチェスター大学に留学後、一橋大学に戻って経済学を教えてきました。そして、平成26年12月より、一橋大学の学長に就任いたしました。いま、たくさんの立高生に一橋大学に来てもらいたいと強く願っています。

実は、私と一橋大学とのかかわりは、子どもの頃まで遡ります。私の父は一橋大学法学部で労働法を専門とする教授でした。父はよく自宅にゼミの学生を招き、議論と懇親の時間を持っていたものです。私もそんな学生さんたちから面白い話を聞かせてもらうなかで、一橋の教育の良さを肌で感じていました。やがて一橋は自分も学生として学んでみたい大学の第一になっていきました。

とはいえ、父親と大学でも顔を合わせるのには抵抗があり、父とは違う経済学部を選ぶことにしました。もちろん、経済学が面白そうだと興味湧いていたこともあります。ところが、受験間際の高校3年の12月、困ったことが起こりました。父が学長に就任したのです。父が学長では何かと気まづいに決まっている・・・しかし、今さらほかの大学を受験することなどできませんでした。共通一次試験導入前の当時の入試は一次試験も二次試験も大学ごとに全く違うものになっていて、私は一橋大学用の受験勉強しかしていなかったのです。現役生の皆さんは、そのときの私の気持ちが分かりますよね。それでも落ち着いて考え、やはり好きで入りたいと願っていた一橋大学に進もうと決心しました。

入学して、やはり良かったと思いました。一橋大学は自由な学風で、何を学ぶかを学生自身が自由に決めることができました。私も小平や国立の大学図書館で、自分の興味のままにいろいろな本を読みあさりました。また体育会ホッケー部に入部し、スポーツにも打ち込みました。



とりわけ面白かったのは、3年生からのゼミでした。私は石弘光先生の財政学・公共経済学のゼミに入りましたが、先生はとても厳しい指導者でした。遅刻はもつてのほか、予習をせずに行けば厳しい質問を受けて居たたまれない状況に陥るので、学生同士が自然と規律をもって勉強に取り組むようになりました。半面、石先生は学生をととても大切に扱って下さいました。スポーツマンの先生は、夏は登山、冬はスキーにゼミ生を連れて行って下さったものです。登山のときは、先生はいつもしんがりを歩き、誰も脱落することのないように気を配っておられました。石先生は、身をもって人間としての在り方を教えて下さったのだと思います。

私も長年、一橋大学でゼミを持ち、20回以上、卒業生を送り出してきました。その経験から感じるのは、大学に入ってから伸びる学生は、受験勉強だけをしてきた人よりも、高校で何かに打ち込んできた人の方が多いということです。立高生の皆さんには、高校時代に何かに一所懸命に取り組むこと、そして勉強面でも高校で身につけるべきことをしっかり学んだ上で受験勉強に臨むことを期待しています。社会に出てからは「文系・理系」といった区別は意味がなくなります。これからの時代は、文理を跨ぐ幅広く深い知識と高度な能力が求められるようになります。そのための基礎を固めるのは高校時代です。立高は、それを可能にする機会に溢れた学校だと思えます。

もう一つ期待したいのは、ぜひ、海外に出て行って自分の得意分野で真剣勝負してほしいということです。私も、ロチェスター大学の博士課程で5年間学ぶことによって、研究者として自立し、国際的に協働し発信する力を身に付けることができました。その5年間は勉強も大変でしたが、外国で、生活費ギリギリの奨学金で自炊生活したことで、いろいろな面で鍛えられたと思います。どんな分野でも、どんな方法でも構わないと思います。世界に羽ばたいて行ってほしいと願っています。

